

日本

# ハンザキ研究所ニュース 2013(3) : 通巻 No. 87



発行 2013年3月31日

〒679-3341 兵庫県朝来市生野町黒川292

Tel/Fax: 079-679-2939

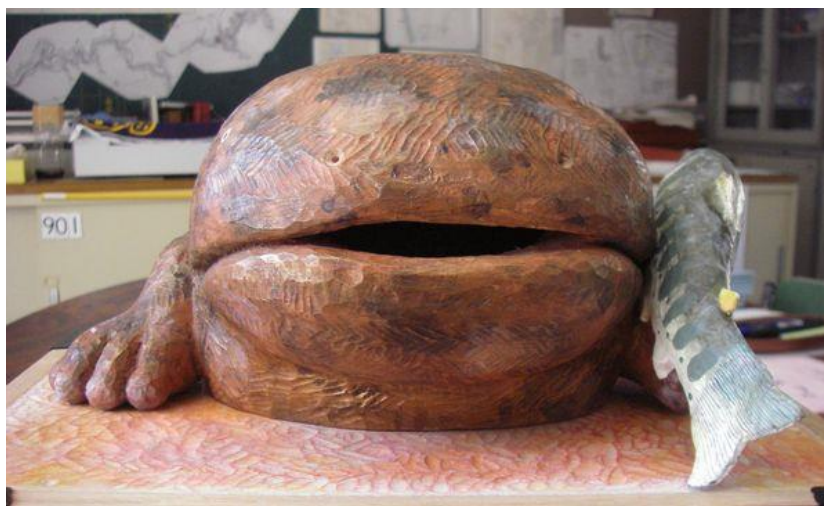
E-mail: info@hanzaki.net

URL: http://www.hanzaki.net

NPO 法人 日本ハンザキ研究所 栃本 武良

## ハンザキ募金箱

ハンザキ研究所は観光施設ではありませんが、多くの方が関心を持って見学に訪れて頂いています。ハンザキは国の特別天然記念物であり、コウノトリやトキと同じランクでの文化財です。しかし、コウノトリのように見学に行けば優雅な姿を見せてくれるわけではなく、夜の暗闇の河川で活動する私同様な大変にマイナーな生き物です。トキなどとは異なり日本特産の、世界に自慢できる貴重な生き物なのですが、闇の中にごめいしている陽の目を見ることのできない動物です。この日蔭の動物をなんとかアピールしていきたい、保護のための調査や生息場である河川環境の保全を考えていこうということで活動しています。そのためにはできるだけ多くの人にハンザキのことを知って頂くことと、ハンザキ研の運営をサポートしていただくことが長続きできるポイントになります。



ハンザキ募金箱

ハンザキ研ニュース 68 に紹介しました朝来市の大垣消防士さんに、ほんの軽い気持ちでハンザキ募金箱を作って頂けませんかとお願ひしました。ある日、届けられたのがこの写真のハンザキの頭部の木彫と台座に大量のカンパを収納できる箱が付いていました。作品の出来栄は無論のこと言うまでもない素晴らしいものでハンザキの可愛らしさが表現されていると皆さんに好評です。「大きな口からは1万円札が、頭頂のスリットからは1円玉が入ります」と見学者に紹介しています。集金箱のカギも魚型と凝ったもので、この1年間でどのくらいの寄付が集まるのか皆で期待しているところです。ハンザキによりよい餌を与えることができるようになるでしょう。よろしくお願ひいたします!!!





写真1 ハンザキ募金箱



写真2 募金箱の“魚型”錠 (凝っていますね!)



写真3 蛙合戦真っ盛り (12までの写真はヒキガエル)



写真4 猪のヌタ場で引っくり返されて死んだ卵



写真5 轍の跡の水溜まりの卵



写真6 親ガエルも泥の中 (矢印)





写真7 ダルマ型幼生のパッチ



写真8 食害現場に残された糞の主はアライグマ?



写真9 大量の卵塊の中から呼吸に出てきた成体



写真10 痩せ小ガエルの大群が続々と上陸 (周辺の黒い部分)



写真11 変態中です



写真12 神河町のハンザキ迷入の用水路

## ヒキガエルの厳しい春

ガマガエルとも呼ばれて嫌われることが多い日本産としては大型のカエルである。姿をあまり見ることができなくなったが、まだまだひっそりと生き延びているところがある。先日、高校の同窓会のニュースレターが届いた。東京の郊外である多摩郡には昭和の 30 年代にはまだまだ自然が多く残されていた。府中市在住の同級生が庭の池で多くのヒキガエルが産卵していることや道路に出て挽き殺されては「汚らしい」と近所から苦情が出るという嘆きを記載していた。私が育った立川市の敷地に小さな池を作ったのは高校生の頃だったと思う。今は、兄一家がお守りをしてくれており、直径 1 ㎡程の水たまりに 50 年以上もの時間が過ぎたのに、相変わらずヒキガエルの産卵があると言う。ブロック塀に囲まれたヒキガエルのサンクチュアリーであるが、門の下の隙間から時々外出する個体があり、「栃本さんちのカエルが来ていますよ」と近所の方からの親切な連絡を頂くと兄が引き取りに出向くそうである。府中と立川と今では都会化された環境に取り残されたカエルの聖地がこれからも続くことを願っているところです。

ハンザキ研の周辺にはまだまだ多くの産卵場が残されているが、多いからといって安心はできなく、その環境は大変に厳しい状況にある。当ニュース 39 号にも書いたように、産卵に集まって“カエル合戦”中の親ガエルが食害されているのです。手先が器用で賢い？アライグマが毒のある皮をむいて食っているのが観察中の 6 か所の産卵場で確認されたのです。散乱する肉片や骨格、しかし卵は毒があるのか食われていない。また、林道の真ん中にある窪みに僅かな水溜まりや道路わきの溜まりで産卵している。ところが、この冬のように雪が少なく春の降雨も同様な状況では溜まる水も湧き出る水もピンチである。林道を通じた車の轍の軟泥が動くので長靴の足で探ってみた。泥の塊のようなヒキガエルの親であった。後日再度観察に行くとその軟泥中に泥だらけの卵塊があった。次の車が通過すれば親も卵も挽きつぶされてしまうだろう。こんな環境でもオタマが孵化していたが、車によって跳ね飛ばされたりしていた。

また、ある産卵場では降雨後に山水がどっと流れ込んで卵塊を引っくり返していた。産卵直後は元通りの上下に戻れるが、ある程度発生が進んだところで引っくり返された卵は戻れずに死んでしまう。日当たりのよい水溜まりでは、卵の表面に緑藻類が繁茂しているのが見られる。卵への影響は分らないが孵化率が悪いようである。さらに悪いことには、このような水溜まりはイノシシのヌタ場になっているから堪らない。卵が押しつぶされたり陸上に跳ね飛ばされて乾いて死んでいる。僅かな産卵数の水たまりでは、今年は卵が見つからなかった。親ガエルが食われて絶滅してしまったのかもしれない。このような危機に見舞われている状況は確認できていない場所でも同様なのであろう。どうしようもない現実かもしれないが、何とかならないものかと思う。新たな脅威であるアライグマや自動車を除けば昔から同じことが繰り返されていただろうが、カエルは絶えることなく生き続けてきたのだ。

## 観察中のヒキガエルの産卵場

### 1 青草谷

この谷は市川の支流であったが、今は直接生野ダムに流れ込む川である。ハンザキの生態調査を開始した 30 年前に、林道の真ん中にある水溜りで産卵していたが、降雨のたびにより下流の水溜りにオタマジヤクシが流されていた。その後は長い間見に行っていないので現状は不明である。

### 2 丁字谷

ハンザキ研にもっとも近い産卵場である。明らかなけもの道がこの水溜りに向かって付けられており、イノシシのヌタ場になっている。ほとんど地続きに何倍もの大きさの湿地があるが、ここには産卵していない。大雨があると道路側溝に卵や幼生が流れてしまう。側溝は雨がないと水が無くなり干上がってしまう。

### 3 梅ヶ畑の山道横の水溜り

ここは比較的安定した産卵場であるが、樹木に陽光がさえぎられ水温気温が低いいためか産卵が最も遅い。オタマを食うイモリも多数集まってくる。

### 4 大物谷

黒川本村にある小さな谷川である。別荘の人から産卵場に肉片のようなものがあるがと言う情報を得て出かけた。アライグマによる食害の確認の最初であった。

### 5 大外の林道

山仕事に行く人から、林道に気持ちが悪いほどのガマガエルが集まっていたので引き返して来たという情報があった。出向くとすでに産卵は終了しており、親ガエルの姿はなかった。しかし、轍の跡の水溜りには多数の卵塊があり翌年のカエル合戦が楽しみになった。しかし、今年は水が少なく僅かな溜まりも軟泥状態で、そのドロドロの中で抱接している 1 ペアが確認できただけであった。その後の観察ではオタマも確認できたが車輪に跳ね飛ばされ挽きつぶされて散々な状況だった。

### 6 大外から長野への峠

崖下に直径 1 寸少々の水溜りがある。崖から滴り落ちる僅かな水が、大雨があると滝となって落下するので卵塊がもみくちゃになって全滅することがある。崖の途中にある多数の穴に親ガエルが潜り込むのを見ることができた。繁殖が終了するとそのまま夏まで仮眠する場所なのだろう。

### 7 大明寺裏山の林道

道路から少し高いところに 50×30 ㌢ほど水が溜まっていた。こんな場所でも産卵するのだと驚かされた。ここは日当たりが良くオタマの変態が最も早く、4月の調査では周辺に痩せ小ガエルたちが飛び跳ねているのが見られた。短くなった尾を持って水際にウジャウジャとひしめいている様子はすごい。そばを通りかかったアリよりも小さな体であった。山からわずかにしみだしてくるのが水源なので、心もとない繁殖の場である。大雨の時には卵塊が流されたり引っくり返されたりするのだろう。



## 揖保川水系流域委員会

今後の30年間の各河川における整備方針を検討する委員会が、各地で開催されている。一級河川は国交省が、二級河川は都道府県が主催して行われる。兵庫県内では武庫川や加古川、円山川、千種川、市川そして揖保川などで実施された。私が関係したのは市川と揖保川である。自然環境の委員として参加する以上、できるだけ良い方向へ話を進めたいと思う。私が参加していたから自然環境が台無しになったなどとは言われたくないからだ。

市川の場合には、ハンザキ研の下流にある県営の多目的の生野ダムと上流の関西電力の揚水式発電所の上部池黒川ダムがあって、源流域の河川環境を悪化させている。この二つのダムは昭和48年に完成されたもので、底水放水式の旧式の構造である。ダム底に溜まった砂泥を流すことと夏には低水温の、冬には高水温の水が出てくるのだ。新しいダムではその時々々の河川水温に近い温度の水深から選択して放水できるようになっているそうである。このような構造に改善することを提案したが、なかなか難しいことのようにだ。だが、今後の30年間何もしないで放置しておくことは許されないことなので、現状調査を行い改善方法の工夫をしていくことを強く提案しておいた。

揖保川の方は14年間もの長きにわたって29回の委員会が実施された。その結果出された整備計画は決して満足のいくものとは言えないものである。昭和30年代の揖保川の姿の70%の回復を図ろうと言う提案があったが、こういう数字はもってもらいたい誰が30年代の揖保川全川の姿を知っているのだろうか。私は、まずこれ以上の人工化をしないことが必要で、今までに河川敷などに作られてきた人工構造物の周辺環境改善を工夫するべきであると終始一貫して主張してきた。しかし、この14年間には次々と運動公園や駐車場などが建設されているのである。許可するのは、この委員会を主催する国交省の河川国道事務所である。一体この委員会での発言に対してどのような考えで使用許可しているのかという質問に対しては、地域からの強い要望があったのでとの回答である。流域住民の総意ではなく、一部の声の大きい人からの要望であることは明らかである。また、揖保川は県下の河川の中でアユの漁獲量がダントツに多い川である。この川には150以上の障害物(堰)が構築されているが、魚道が付いているのは一部でしかなく多くは機能していない。これを改善する委員会も開催されてきて新宮町の吉島頭首工は、右岸に下流突出型の魚道が1基あったが、これを両岸に3種ずつの魚道を付けるという画期的なものである。しかし、委員会で検討されたのはここだけで次々と中途半端な魚道が付けられている。河川は源流域から河口まで一続きの環境であり、途中の1か所の堰をシンボリックに改善しても川の環境は良くなるしないのだ。おまけに国が管理するのは山崎町までであり、そこから上流は兵庫県の管理であると言う。河川を上下流に分断してしまうのは人間の勝手な思考であり、河川内の生き物にとっては迷惑この上ないことだ。1級河川は源流域まで国が管理することで自然環境の回復に努めてほしいということも提案した。

もう一つの提案は慣行水利権の問題解決である。河川法が施行される以前からの権利と

言うことで水利組合が強い発言力を持っている。慣行と言うのは、昔から水田耕作に必要な水を取っていたことによる。昔は人海戦術で人の手によって石を積んで堰を造り取水してきたものである。大水が出るたびに石積み堰は流され再々の重労働で再構築されてきたのである。それがコンクリートという便利なものの出現で画期的な堰が作られるようになった。

石積みの堰は隙間から水が流れてしまうので、魚類なども遡上可能な構造であったが、コンクリート製の堰はそれを無くした利水上は大変に効率のよいものになったのである。渇水で河川の水量が減少しても、この堰によって水を取り込むことができる。これが慣行水利権であろうかと言う疑問をぶつけてきたが、一向に改善されない。私は昔の取水慣行以上の水を取っていると考えて発言してきた。ある河川では魚道から水が流れてしまうので土嚢で塞いで取水していることがあるそうだ。言語道断の暴挙であり慣行以上の取水をしていることは事実だ。河川の水が無くなっても権利だけを主張していることになる。川に水が無くなってしまうと水中生物は生きていけない。昔の石積み堰の状況を考えれば慣行水利権は見直さねばならないのは当然で流量に比例した取水権を考えるべきだと思う。

これらの問題点を14年間主張してきたが、作文された整備案にはがっかりさせられた。あまり細かいことを記載すると後日縛られてしまうからだとの説明であったが、要するにその時々都合のよい解釈ができるような作文になっているのである。今後の30年間の河川工事を誰が見張っていけるのだろうか。14年に29回もの時間をかけた委員会での詳細な意見、ニュアンスが伝わるとは思えない。委員の全てが30年後には誰も生きていないだろうし、事務局の担当者も同様だろう。こんなことでは高額な税金を使った委員会の存在そのものが責任を問われることになるのだ。

私の意見は素人の青臭い議論だと一蹴されるかもしれないが、自分が関係した河川だけでもより良い方に向かって整備（河川工事することではなく、真の意味での）されていくことを願って頑張ってきたつもりだが、虚しい気もする。国の中央からの号令で全国の河川で整備委員会が一斉に進められることになったので仕方なく委員会を開催しているかのようにも勘ぐるができる。兵庫県が管轄する二級河川は百近いそうである。これらの河川すべてについてこんな委員会が実施されていくのかと思うとこれまた空しいことだ。

役所と言うところは、担当者が替わると解釈が変わってしまうとよく言われる。その時々都合が優先することや、担当者の意識次第で良くも悪くもなっていくようだ。私は水族館の飼育係として河川工事などに首を突っ込むことになったが、「飼育係がなんでそんなことに？」と再々疑問をぶつけられてきた。「野生生物の終身刑の牢屋の番人」と悪口を言われることもあるが、確かに多くの魚類の命を水槽内に閉じ込めてきた。飼育下で繁殖させて野外に放流することも多少はやって来たが、全体的にはほんのわずかなことに過ぎない。それよりも河川環境を守る、再生させることは水生生物に対する大きな償いになっていくと思っている。何もしなければ水槽内で飼育し殺してしまった命の数の何倍もの命を知らぬ間に消していくことになる。平成の河川法改正の柱である環境という言葉は重要だ。

ハンザキ研日誌

2013年3月

- 2日 神戸市立須磨海浜水族園助成結果発表会 (岡田副理事長)
- 4日 姫路市立水族館の開館以来の餌料納入先だった魚谷商店休業、50年間の付き合い
- 6日 ・ヒキガエル産卵場調査1 (大外、丁字共に不産)  
・田口理事、大阪府大生4名と夜間調査 (17個体計測、内3新規登録)
- 11日 ・新名神建設事務所から3名視察に来所  
・ヒキガエル産卵場調査2 (丁字、成体2個体、不産)
- 14日 円山川水系自然再生推進委員会開催、豊岡市民会館にて
- 15日 ・ハンザキの募金箱受増 (朝来市の大垣消防士の木彫作品)  
・ヒキガエル産卵場調査3 (大外は卵、長野は卵と成体5匹、丁字で蛙合戦中)
- 16日 ・事務局会議、9名  
・アンコ淵の巣穴に黒主ではない個体出入り確認、黒主はいずこへ?  
・ヒキガエル産卵場調査4 (梅ヶ畑はまだ不産、丁字で食害、大物は不産、長野は食害と7成体)
- 17日 同上 5 (丁字は不産、大外は卵と3成体、長野は2ペアと卵)
- 19日 新名神道路建設環境委員会、新大阪にて
- 20日 ヒキガエル産卵場調査6 (丁字で卵確認)
- 21日 同上 7 (梅ヶ畑で卵と2成体)
- 22日 神崎郡神河町の新田ふるさと村で保護されたハンザキの測定 (佐藤会員と)
- 24日 国交省姫路河川国道事務所の揖保川水系流域整備委員会開催、たつの市にて
- 28日 京都市中国オオサンショウウオ問題検討委員会開催、京都市にて
- 30日 ヒキガエル産卵場調査8 (大外は轍が多数あるが卵不明)
- 31日 同上 9 (梅ヶ畑の卵ほとんど死亡))

.....

ハンザキ所長のツブヤ記録

ヒキガエルの産卵期になった。6か所を観察しているが、なかなか厳しい状況が見受けられる。電動アシスト車があるのでずいぶん楽になって、山道の途中にある産卵場へ頻繁に出向くことができるようになった。と言っても、延々と続く登り道をこぐのは大変は大変だ。下りは楽なのであるが、注意しないとスピードが出過ぎてうっかり石や木の枝に乗り上げると横滑りするので危険であり、神経を使うことになる。今年は雪も雨も少なく、林道のくぼみが干上がりそうになっている。近くにもっと大きな水溜りがあるのに、なぜか小さな溜まりの方で産卵していることが多い。親が産卵場に集まってくる時期と産卵の確認、孵化して変態が終わり上陸するまでの観察になるが、オタマを捕食するためのイモリの姿も多く、成体の毒のある皮をむいて食うアライグマの出現もあって大変だ。降雨のたびにより下流側の水たまりに流されていくオタマの行方も心配の種である。